コザ暴動プロジェクト in 大阪

＜主催＞「都市と暴動」シンポジウム実行委員会（代表：山﨑孝史）
＜共催＞「コザ暴動」プロジェクト実行委員会（代表：國吉和夫）
人文地理学会政治地理研究部会（代表：北川眞也）

大阪にやってきた「コザ暴動」

山﨑　孝史

1. そもそものきっかけ

私が本誌編集者の比嘉豊光氏と初めて会ったのは、2015年12月20日（コザ暴動45年目）の夜であった。この日は國吉和夫氏（元琉球新報報道カメラマン）や比嘉氏らが沖縄市（旧コザ市）で企画した「コザ暴動プロジェクト」のギャラリートークが「一番街」と呼ばれるアーケード通りで開催された。

トークの後、近くの焼鳥屋で比嘉氏、トークに登壇されていた比屋根照夫氏（元琉球大学教授）、そして翌年4月に「コザ暴動プロジェクトin東京」を開催されることになる明治大学教授の山内健治氏らが飲んでおられた。私は自己紹介して、名刺を渡したところ、その時皆さんはかなり酔っておられ、比屋根氏からは「お前は本土の人間か」などと、比嘉氏からは「学者は嫌いだ」などと言われた。

私は酒の席でそういう風に言われても全く気にならないタイプで、適当に聞き流していたのだが、比嘉氏からはさらに「大阪でもこういうイベントをやる気があるのか」と詰め寄られた。それに「はい」と返事したのが、今考えればこの企画に関わるきっかけだった。もっとも当の比嘉氏はそのことは全く覚えておられないのであるが。

2.「コザ暴動」との関わり

私は1995年ごろから沖縄に関心を持ち始め、特に米軍統治期のコザの研究を始めたのは2004年ごろだった。その直接の理由は復帰前に琉球を統治していた琉球列島米国民政府（ユースカー、USCAR）の文書が1997年に機密解除になり、沖縄県公文書館が米国で撮影・収集した文書群について、2001年からオンライン検索できるようになったからである。

私はAサイン制度による対米売春・性病管理の文書を探していたが、当時はまだUSCAR公安局の文書などは国内では未公開だったので、私は直接米国メリーランド州にある国立公文書館別館でこれら未公開文書の収集を始めていた。その中にコザに関連する文書が多数存在し、既に『米軍が見たコザ暴動』（沖縄市平和文化振興課、1999年）で翻訳されていたコザ暴動関連の文書も含まれていた。私は2007年ごろから沖縄市での現地調査にも着手し、戦後の沖縄市（コザ市）の資料収集に取り組む沖縄市総務部総務課市史編集担当にも調査でお世話になるようになった。

米軍統治期のコザを考える上で、コザ暴動についても私は当然関心を持っていた。今回も登壇いただいた古堅宗光氏（元NPOコザまち社中幹事）が2010年に主宰し、市史編集担当も協力していた「コザ暴動を記録する会」による暴動参加・目撃者の聞き取り内容については、拙稿「軍民境界都市としてのコザ」（『持続と変容の沖縄社会』所収、ミネルヴァ書房、2014年）で分析していた。また、それを踏まえて2014年12月20日に市史編集担当が運営する戦後文化資料展示室「ヒストリートII」で「二つの「コザ騒動」」と題して講演も行っていたのである。

したがって、比嘉氏に「大阪でやる気があるのか」と聞かれた時には、「はい」と答えることに躊躇はなかった。そのあと、2016年4月に「コザ暴動プロジェクトin東京」が開催される前に、最初のプロジェクトのコーディネーターをされた今郁義氏から「大阪でもやってほしい」という正式のご依頼をいただいた。それで東京での集会にもお邪魔し、その日のうちに「コザ暴動プロジェクト」実行委員会の皆さんにも、大阪開催の大まかなプランをお示しした。

この時は東京での開催構成を踏襲することを考えていたのだが、東京での懇親会の席上、登壇者のお一人（本土出身者）から「コザ暴動のような暴動は本土ではありませんよね」と聞かれ、私は「おやっ」と思った。というのは巷間「暴動」と呼ばれるような出来事は国内を見ても、過去多々発生しており、私の勤務先に近い大阪市西成区の寄せ場「釜ヶ崎」では戦後24回もの「暴動」が起こっているし、歴史的には20世紀の初めに東京の日比谷公園周辺では何度も「暴動」が発生している。もちろん、「暴動」をどう定義するかによって、比較の対象は変わるのではあるが、コザ暴動が沖縄を含む国内で例外的な暴動のように認識されるのはどうしてかと、私は考え始めた。

もう一つ私が気になったのは、コザ暴動を現在まで続く沖縄での反基地闘争の「原点」のように解釈・評価しようとする傾向である。沖縄市での集会も明治大学での集会も最後はそうした括り方になった。つまり、現在の辺野古や高江をめぐる状況は、沖縄に再びコザ暴動のような事態を生起させる可能性があるという認識である。

現在の日本と沖縄との関係を考えれば、この種の解釈に向かうことはある意味理解できる。現在の状況こそがコザ暴動をここまで社会的に想起・注目させているとさえ言えるだろう。しかし、それはコザ暴動自体の理解として適切なのか、私は少し疑問に感じた。

何らかの構造的抑圧に対する民衆の集合的抵抗であれば、無秩序な暴力の発現であっても世界に類例は多い。コザ暴動はどこまでそれらと違うのだろうか。そもそも「暴動」とはどのように定義できるのか。そうした行為の間の類似性や差異をどう理解するのか。暴動一般の中

にコザ暴動はどのように位置づけられるのか。これら暴動の共時性（並存すること）に関する問いはまだ十分に答えられていないのではないか。

このこととも関わって、コザ暴動を現在の沖縄島北部での米軍基地建設反対闘争に直接重ねあわせてどこまで理解することができるだろうか。「コザ暴動の当時と何も変わっていない」のは事実であろうか。確かに沖縄をめぐる「構造的差別」は復帰後も残り続けている。米軍による事故・事件も後を絶たない。しかし、本当に何も変わっていないのだろうか。こうした沖縄の暴動や抵抗の通時性（継続すること）に関する問いについても十分な答えが出されてはいまい。

むしろ、2010年ごろからコザ暴動を想起するイベントが継続される背景には、「抵抗する沖縄」の思想と行動が、それを直接経験した世代の人々には、以前ほどのレベルにないという苛立ちや焦りのようなものがないだろうか。今回の企画の背景には、私のそうした疑問が反映されていたことは正直に記しておきたい。

3. 大阪での企画概要

上に述べたような問題意識から、昨年12月に始まったプロジェクトの形式を踏襲しながらも、大阪でのプロジェクトにおいてコザ暴動をより普遍的な枠組みの中で再評価できないかと考えたのである。

とりわけ、今回のプロジェクトが大阪市内で開かれることから、西成（釜ヶ崎）暴動についての講演に、現場で歩きながら考えるフィールドワークを組み合わせたセッションを加えることにした。コザ暴動については写真展と写真家の語りで現場の状況はある程度理解できることから、基本的に釜ヶ崎とコザを対比する構成とした。さらに、暴動をより普遍的に考えるために、20世紀初頭の日比谷公園周辺で発生した日比谷焼打ち事件をはじめとする複数の暴動の性格を考える講演を加えることにした。

その結果、大阪のプロジェクトは過去2回の企画と同様に、コザ暴動写真展と写真家によるトークに、釜ヶ崎のフィールドワークと大阪・東京・コザという三つの都市暴動を考えるシンポジウムを組み合わせる構成にした。結果、開催日を12月20日にできるだけ近づけ、プログラム構成を以下のようにした。

◆「コザ暴動」写真展

期日：2016年12月16日（金）～18日（日）
時間：午前10：00～午後6：00（入場無料、16日は午後7時まで開場延長）
場所：大阪市立大学都市研究プラザ　船場アートカフェ（辰野ひらのまちギャラリー）
出典写真点数：約100点
出展写真家：大城弘明、國吉和夫、平良孝七、比嘉豊光、比嘉康雄、松村久美、山城博明、吉岡攻
関連展示品（沖縄市提供）：黄ナンバープレート、「騒乱罪粉砕市民集会」のチラシ、沖縄タイムス「コザ暴動」号外、「12･20反米騒動で弁務官に抗議」コザ市職労速報、琉球新報「コザ反米騒動 政治問題に発展」紙面、「被害を受けた車両・建物」の図

◆フィールドワーク「西成（釜ヶ崎）暴動を歩く」

期日：2016年12月17日（土）
時間：午後2:00～4:00
集合場所：大阪市立大学都市研究プラザ　西成プラザ
内容：戦後24回発生した西成（釜ヶ崎）暴動に関する現場レクチャーと釜ヶ崎フィールドワーク
案内者：山田實（NPO釜ヶ崎支援機構理事長）、水野阿修羅（釜ヶ崎地域史研究家）
参加者：事前申込者47名、当日参加者45名（抽選は実施せず）

◆シンポジウム（人文地理学会政治地理研究部会第20回研究会）

期日：2016年12月18日（日）
時間：午後１：30～６：00
場所：大阪市立大学都市研究プラザ　船場アートカフェ（辰野ひらのまちギャラリー）
第１部 シンポジウム「都市と暴動―都市はいかに暴動を生み出したか」
パネラー：
山田實（NPO釜ヶ崎支援機構理事長）
「転換点としての90年西成（釜ヶ崎）暴動」
藤野裕子（東京女子大学准教授）
「戦前東京の暴動と労働者文化」
山崎孝史（大阪市立大学教授、進行役）
「基地の街コザと暴動を語る論理」
第２部「コザ暴動」ギャラリートーク
パネラー
國吉和夫（写真家、元琉球新報記者、当日欠席）
小橋川共男（写真家）
比嘉豊光（写真家、雑誌編集者）
松村久美（写真家）
古堅宗光（元NPOコザまち社中幹事）
恩河　尚（沖縄国際大学非常勤、コメンテーター）
今　郁義（コザ暴動プロジェクト実行委員会、進行役）

18日に登壇予定であった國吉氏が病気で欠席された以外は、全てのイベントが当初プログラム通りに実施された。大阪のプロジェクトについては、國吉氏が代表する「コザ暴動プロジェクト実行委員会」と筆者が世話人を務める「人文地理学会政治地理研究部会」（北川眞也三重大学准教授代表）を共催組織とする「「都市と暴動」シンポジウム実行委員会」を仮の組織として立ち上げ、私が形式的に委員長となった。施設（船場アートカフェと西成プラザ）の利用許可をいただいた大阪市立大学都市研究プラザと、会場スタッフとして協力してくれた学生たちと私が所属する大阪市立大学地理学教室が協力機関となった。また展示品を借用した沖縄市役所から後援をいただいた。

メディア関係では、琉球新報社、沖縄タイムス社、朝日新聞社から後援を、NHK大阪から事前電話取材、朝日新聞社から事前訪問・当日取材、琉球新報社から当日取材を受けた。このうち琉球新報社が事前（12月17日）、事後（12月21日、23日）に関連記事を掲載していただいた。特に23日の記事は紙面の半分を占める大きなもので、3日間のイベントについて記者大城周子氏が詳細に伝えた。

イベント開催期間中の入場者は、船場アートカフェでの記名者数が16日16名、17日27名、18日75名であり、3日間で延べ118名以上に上った。そのうちの33%が大阪市内からで、大阪府外からの参加者が最も多く36%であった（残りは府内他市町村）。17日の釜ヶ崎フィールドワークに参加した45名を加えると、総参加者が160名を上回る盛況であった。

なお17日の夜には関西沖縄文庫の金城馨氏と比嘉氏の取り計らいで在阪の沖縄関係者との懇談会も設けられた。

4. シンポジウムの講演から

第1部に登壇した講演者の内容を簡単に紹介しておこう。山田實氏は、寄せ場釜ヶ崎の形成過程を明治期から説き起こし、戦後の高度経済成長期に安価な使い捨ての日雇い労働力のプールとして釜ヶ崎が国策的に整備され、行政・警察・暴力団による労働者への不当な人権侵害が過去24回発生した暴動の背景にあったとした。特に1990年の暴動が、些細な出来事から西成警察署の収賄事件への抗議行動へと展開し、5日間にわたる機動隊との衝突に至る過程が詳述された。また、こうした暴動の中でも、山田氏をはじめとする地域労働組合のメンバーが混乱する事態に冷静に対処していたことが指摘された。

藤野裕子氏は、20世紀初頭における東京の日比谷公園周辺で発生した暴動を対象に、発生から終息に至る過程を、社会構造論的にではなく、下層労働者文化の共有という観点から解説

した。日比谷焼打ち事件の場合、日露戦争後の講和条約に反対する政治集会が暴動に展開するが、それは政治集会の目的にそったものではなく、日常的に社会上層から蔑視されながら、独自の男性労働者文化を共有した若者が、集会を契機に群集化し、うっ積した感情を暴発させ、暴力を引き継いでいったと氏は解釈した。また、1920年代以降の労働者の組合・組織化を経て、20世紀初頭のような都市大に拡張する暴動がなくなると指摘した。

私は、復帰前のコザの都市構造と社会経済的特徴に触れた後、米軍資料をもとに、時間的空間的にどのようにコザ暴動が展開したかを詳述した。釜ヶ崎暴動同様にこの暴動も些細な交通事故が多数の民衆を巻き込む暴動に拡大し、多数の米軍車両の放火・破壊と負傷者が確認されている。さらに、第2部に登壇した古堅氏が主宰した「コザ暴動を記録する会」の録音データを用いて、40年後にコザ暴動が回顧される語りのパターンを分析した結果を説明した。その特徴としてコザ暴動は「秩序ある暴動」として肯定的に評価される傾向があり、その評価は対人暴行の少なさ、延焼を防ぐ理性的行動といった事実から補強されていることを指摘した。また、当日破壊行動のなかったゲート通りの住民が8ヶ月後に黒人集団と対峙する「第二コザ事件」について、その性質をコザ暴動と人種的に分離されたコザの都市構造と結びつけ解説した。

このように第1部では、三つの都市暴動の構造と特徴が詳述された。特に、相違点と共に共通点があぶり出され、暴動には偶発性や群集の理性的行動といった普遍的側面があることが確認された。また質疑応答では、1920年代以降の暴動減少期でも依然として疎外される労働者とそのうっ積の行方、「第二コザ事件」の現在での受け取られ方、三つの都市暴動のその後の政治社会的過程への影響について議論がなされた。

第２部のギャラリートークでは、今郁義氏の司会のもと、一巡目に、まず当時の現場を知る登壇者が12月20日にどのように行動したかを述懐した。古堅宗光氏は当日現場を見た衝撃とそこでの群集の行動を描写し、比嘉豊光氏は圧政に抵抗する現場の写真を伝える意味を語り、松村久美氏は現場の光景に魅了されつつどう写真家として行動したかを述べた。当時東京在住の小橋川共男氏は、沖縄人2世として復帰後に沖縄の写真を撮るにいたった経緯を説明し、沖縄市史編集に携わる恩河尚氏は米国で発見したコザ暴動関係資料から明らかになったいくつかの事実を紹介した。

二巡目は、古堅氏が、「記録する会」の証言から見えるコザ暴動の特徴をコザという多民族都市の「精神」に結びつけ、比嘉氏はコザ暴動がその後の沖縄闘争を勇気づけた事実、そして現場写真と闘争との往還的関係の重要性を訴えた。松村氏はかつての黒人街照屋の変容の中に、旧特飲街再生の過程が見出されるとした。小橋川氏も事態が緊迫する高江で抵抗する人々の写真を示し、沖縄の現状を写真で発信することの緊要性を強調した。最後に恩河氏は、歴史家としての観点からコザ暴動の背景と意義を説明しつつも、いまだ解明されざる課題が山積していると括った。

最後に出席者から寄せられた質問やコメントをまとめておきたい。最初の発言者は、展示された写真が自律的にとられていることがわかり生き生きとしていると感じると同時に、語りで思いが先に走ると事実が上塗りされてしまわないかとの懸念を示した。二番目の発言者は、フリーカメラマンとして現場で活動に圧力がかからないのかと質問した。三番目の発言者は原爆や空襲の被災地を訪れる人々の反応として「今はいい時代になった」という感想が若い人に多いことを残念に思い、この沖縄の写真展と暴動は今に続いている話だと再認識したと述べた。最後の発言者は、暴動は権力側から見れば非合法かもしれないが、民衆にとっては非合法でないかもしれず、本当の民主主義は法律では決め

られないので、そういうものを発掘し、意義を見出していく必要があると指摘した。

5. 参加者のコメントから

船場アートカフェへの入場者に対してはアンケート用紙の記入を要請し、39名の参加者から回答を得た。以下ではイベントの内容別に、特徴的なコメントを紹介しておく。

写真展については、「事件の全容が良く分かる」、「暴動の光景それ自体と一緒に当時コザの街並みと写りこむ人々のことを凝視した」、「あまりのはげしさに驚いた」、「詳しい事は知らず今後学びたいと思った」、「実際に写真家がいるところで写真を見るという貴重な経験ができた」、「キャプションのない写真が語りかけるものに圧倒された」、「写真（映像）を交えたことで深く理解できる」、「写真は大変な臨場感だった」という評価を得たが、写真展だけの参加者からは「事件の経緯を説明する資料などがあればよかった」、「写真の解説や地図をつけると分かりやすかった」といった感想があった。このように写真を写真そのものではなく、一種の現場資料として見る人もいることがわかった。写真展初日にコザ暴動の概要を説明するキャプションを掲示し、参照地図のコピーなども配布しておいたが、写真一枚一枚とその場所の特徴や背景と対比することはやや困難だったと思われる。

シンポジウムについては、私の発表内容が「一般の人にはわかりにくかろう」というコメントもあったが、講演・ギャラリートーク共に都市暴動の共通点と相違点、コザ暴動の経緯・内容を詳しく伝えていてわかりやすかったという肯定的な評価であった。

そのほかには、「フィールドワークに配布資料が欲しい」、「写真展の期間がもうすこし長かったらよかった」、「研究者や活動家だけでなく、一般の無関心層への働きかけも必要ではないか」という建設的意見と共に、「沖縄の平和学習の観光化を懸念する」、「コザ暴動が正しく社会に伝わって欲しい。ネトウヨに都合よく切り取られて、沖縄の偏見に利用されないか」といった、昨今の沖縄への本土のまなざしを危惧する意見もあった。

これらいただいた意見は、今後の「コザ暴動プロジェクト」の形態と内容について十分参考になると考えられる。

6. おわりに

このように「コザ暴動プロジェクトin大阪」は、これまでの沖縄と米国・日本という縦の関係から、複数の「都市と暴動」という横の関係を組み込む試みであった。準備段階、展示会期間、シンポジウムの時間配分など反省すべき部分も多々あったが、これまでのプロジェクトになかった、コザ暴動を多面的に照らし直す試みは、概ね好意的な反響をいただいたと思う。ご来場、ご登壇いただいた方にはもちろん感謝したいが、それ以外の協力者にもお礼を述べておきたい。

私自身写真展の企画は初めての経験であったが、沖縄市にあるギャラリーラファイエットを中心に、沖縄関連の展示会を多々企画してこられた秋友一司氏のご協力なしにこのような規模の写真展は不可能であった。沖縄市役所市史編集担当の伊敷勝美氏には、写真を肉付けできる各種展示資料の借用と搬送の便宜を図っていただいた。山田實氏は講演のみならず水野阿修羅氏と共に企画に沿ったフィールドワークのご案内を下さった。大阪市立大学側では、都市文化研究センター研究員の今野泰三氏が企画から招聘に至る煩瑣な作業の大部分を補佐いただいた。文学部地理学コース三年生の青陰麻那、大谷真樹、鈴木まゆ、千原佐和、中西広大の各氏には写真展・シンポジウム会場のスタッフとしてお世話になった。特に大谷氏からは会場で撮影された写真の提供を受けた。ここに深甚の感謝の意を記しておきたい。

おそらくコザ暴動は今後も様々な形で語り継がれていくに違いない。私自身はこの暴動は多

角的な検証を経てもなおその意義を失うものではないと固く信じている。しかし、沖縄の状況が厳しい今こそ、この暴動が本当になぜどのように起こったのかを、単に教訓として「活用する」ことを超えて、理解する必要があると考える。さて、このプロジェクト、次はどこに行くのだろうか。

［付記］本企画の開催にあたっては、日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「軍事的圧力に抗う文化的実践―沖縄とパレスチナにおける地誌編纂と景観修復」（15K12954）、同（基盤研究B）「グローバル化の新局面における政治空間の変容と新しいガバナンスへの展望」（15H03277）（いずれも研究代表者：山﨑孝史）を使用した。詳しい講演と質疑応答の記録は「政治地理のページ―山﨑孝史研究室」http://polgeog.jp/ に掲載する予定である。